

哲学は何のためか

学校で哲学の講義を担当していたころのことだが、「ご主人は大学で何を教えておられるの」と友達から聞かれ、「哲学です」と答えるたびに、何だか肩身の狭いような気分になると妻が言つたことが思い出される。

「ほう、むずかしい研究をなさつているのですね」というような返事が返つて来ること

は稀で、たいていは「なんだ」というがつかりしたような相手の表情に出会ってしまう、ということであった。亭主の肩をもたねばならない立場にあつたはずの妻にしてみたところで、こんな表情に出会うと、市民たちと「無知の知」というような哲学論に明け暮れていたソクラテスの妻のクサンチッペにひそかに同情していたのかも知れない。大学紛争が収まつたころのことである。

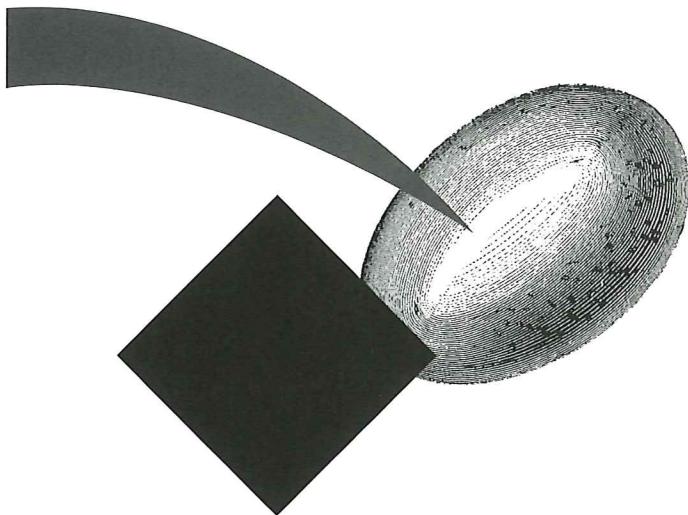
当時、教養部の学生諸君の試験答案の片隅に毎年決まつたように記されている二種類の言葉があつたことを覚えている。いわく、

もつとやさしくならないものか」

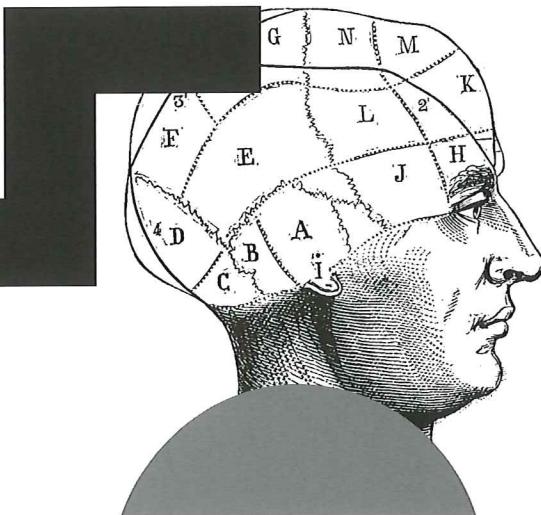
「哲学を学んだところで社会に出ても何の役にも立たないと思う。いつたい、何のために哲学なんか学ぶのですか」

もちろん、哲学科に進んだ学生からは、こんな言葉を聞いたことはなかつたが、それでこの種の意見は、ひとり私のいた大学だけに限られたものではなく、ハイデガーやヤスバースのようなドイツの哲学者たちでもやはり経験した全世界的な現象のようである。

人々の哲学嫌いは、古代ギリシャに人類のこの大切なとなみが始まつたときにすでに発生した人間の根強い一般的な傾向であり、ソクラテスやプラトンなどの大哲学者たちの仕事はつねに、この傾向を代表する「ソフィスト」たちとの闘いだつたとも言える。ソフィストとは一言で言えば、自分がよく知らぬことを知つたかぶりして民衆を啓蒙しようとした人間のことである。だからソフィストは、ギリシャの昔だけでなく、いつの時代に



もいる。本当のこと、真理というものに共鳴する情熱のない人間のことだからである。



真理という言葉の反対は何かと言うと、世の中の役に立つ有用性とか有効性というものである。大阪弁で言うと、「それ、なんぼのもんや」という一語で片づけられる世界の原則である。先に紹介した試験答案の学生にしてみたところで、こんなに進歩した物理学には自分の頭はついていけない、物理学はもつとやさしくならないものか、という不平はまさか言わないだろう。物理学の成果は一般人の目に見えるからである。哲学に對してだけは、むずかし過ぎるという不平をぶつけるのである。

それは、人生において一番良いことは有効性だということを彼が自明のこととして信じているからである。しかしこれはこの学生の個性的な意見などではなく、世間一般に広く通用している現代人の意見を代弁しているだけの話である。何かの役に立つものでなければ何の値打ちもないという考え方が現代人の価値観の根っこにあると言つても過言ではないであろう。

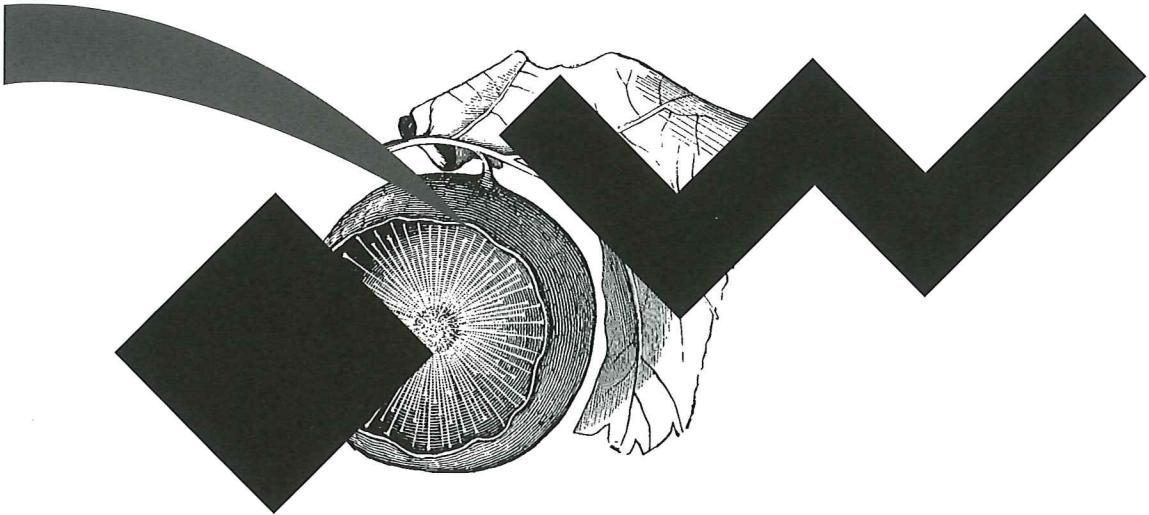
先日、文部科学省は、「国立大学法人の組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組

む」ように国立大学に通達を出した。時代の「社会的要請」という極めて不安定なものによって学問研究の組織そのものを変更するようなことが、政府関係者の思いつきによつて安易に行われようとしているわけである。哲学者フィヒテが大学論のなかで、「大学というものが成り立つ背後には永遠がなければならぬ」という真理を語ったのは今から二〇〇年ほど前だが、それを思うとあらためて隔世の感がする。

しかしながら、そもそもこのような実用主義と相入れないものが、哲学という学問の本質にはふくまれているのである。学問が常識の立場でない以上、すべての学問はむずかしい。能力や努力なしに理解することは不可能である。しかし、哲学のいとなみには他のすべての学問にはないもう一つの種類のむずかしさがあるのである。

それは、今ここに生きている自己」という存在の驚くべき謎に気づき、これに覺醒し、これを考え方づけるということのむずかしさである。これは折学以外のもろもろの学問のむずかしさとは性質を異にする。どんなに哲学用語をやさしくしてみても、このむずかしさを哲学からとり除くことはできない。それをとり除いたら哲学は哲学でなくなるからである。

今日の社会のなかでは、すべてのいとなみ



が有用性や有効性を目指している。しかし、人生を生きる自己の謎を問う哲学だけは、ひとりこの滔々たる一般的傾向に反対するのである。哲学者が反対しなくとも、哲学の本質が反対するのである。なぜなら、もともと人生は決して有効性などというものを目的として成り立つてはいないからである。

この世に自分の意志によつて生まれて来た人は一人もいない。幸福な人生や不幸な人生はあつても、有効な人生というようなものはない。いつたい有効な人生とはどういう意味なのか。哲学という仕事は、このことに気がつくことから始まるのである。哲学の本質には実に一つの無効用性というものがふくまれているのである。実生活においては何の役にも立たないものを考へることこそ、人間に与えられた力なのである。どういう力かといふと、人間が機械になる崩壊の危険をくい止め、人間を人間にする力である。

自己が生きている人生の謎について考へとは、謎を解こうとするということなのではない。もしそうなら、哲学は科学の一つになってしまふ。そうではなく、人生や自己がそれであるところの謎を謎として正しく目撃するということである。

自己とか、人生とかの概念をもう少しく精密に限定する必要がありそうである。ここで言う人生とは、自分の外部にある社会とか自

然科学が捉える物質世界と区別して考えられたもののことではなく、内側から自己と深く結びついた世界のことである。古代の哲学者たちが使つた無限な「宇宙」という言葉に近い。自己は物質界や社会の内にもあるが根本的には宇宙のなかにある。昔から一流の哲学は、人生や自己をそういう宇宙の場から見て來たのである。どんな社会になつても、われわれは宇宙内存在であるということを止めることはできない。自己存在には一つの不思議な垂直線が刻まれてゐるのである。人生とは自分が宇宙に存在していいるということの謎である。

人間はいろいろなことを問う存在である。

日常生活のなかで出会う身近な問題に対処して生きているだけではない。百億光年も先の星雲の様子や、遺伝子構造の情報についても詳しく知ることができる。しかし、そういう種類の問いはすべて、われわれが自由に思つて立てる問い合わせであるから、どうしても問わなくてはならない問い合わせではない。自己と自己以外のものとの関係についての問い合わせであるけれども、それよりも以前にもつと根源的な一つの問い合わせがある。それは、いろいろなことを問うその自己そのものについての問い合わせである。忘れてはよいが、どんなに忙しかろう

れわれを決して離さない。

によって終わることもできないからである。

われわれの自己は三つの謎をもつている。

第一は、その存在の由来についての謎である。われわれは始めからこの人間世界にいたわけではない。せいぜい数十年前に人生と呼ばれている場所に来たのである。それではどこから人生に来たのか。父母から生まれたというだけでは、根本的な答えにはならない。

それなら、その父母はどこから来たのか、そのまた父母はどこから、というふうに時間軸の系列をどんなに遡つてみたところで、それは身体をもつた生物としての自己の起源を

問うてゐるだけのことである。身体をもつている自己は身体ではなく、身体を超越している。問われているのは、自己そのものの根源である。【父母未生以前の自己本来の面目】

という禅仏教の公案も、自己存在のこの謎への問い合わせで示しているのである。われわれの意識が問うこと止めたところで、われわれの存在そのものはこの謎を自己に問うてやまない。

第二には、そういう宇宙の内なる自己の行方はどこかという問題である。死ねば焼かれ骨という物質に帰す、ということは何の答えにもならない。なぜなら、自己が身体と共に始まつたものではないかぎり、身体の消滅

ころの自己、どこから来てどこへ行くかもわからない自己とはいつたい誰のことなのかという問いである。

われわれにとつて一番身近なものは、一人一人の自己というものであろう。他人とは離れていても、自分が自分と離れることは片時もない。しかし、それほど自分の身近でよく知つているはずの自己こそ、自己にとつて最も深く隠されたものなのである。

問われているのは、自分の身体や心理や性格のことではない。知・情・意などの、いわゆる精神現象でさえ、なお、自己にとつて外部のものである。そういうものを衣服のよう身につけている裸形の自己とはいつたい何者なのか。

これまでの哲學史を眺めても、時代を画するような新しい哲學が生まれたときには、ソクラテス、アウグスティヌス、デカルトのように、皆それぞれの仕方で、自己とは何かといふ問い合わせから出発している。自己がそれであるところの宇宙的な謎と正面から向かい合つたのである。

(おおみね あきら・大阪大学名誉教授
著書に『親鸞のコスモロジー』法藏館)

